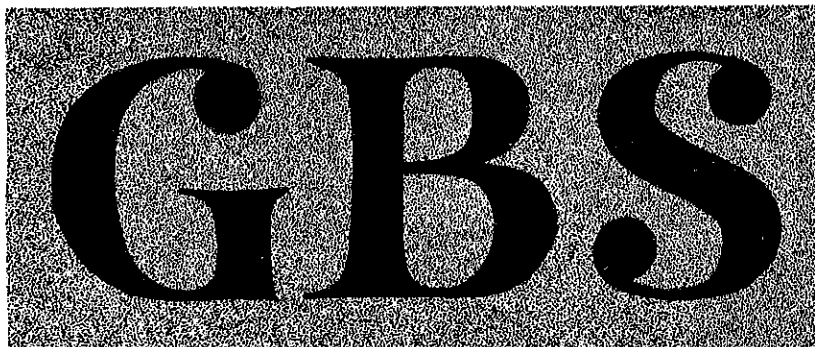




日本バーナード・ショー協会

The Bernard Shaw
Society of Japan

〒140-12 瀬戸市上品野町1350

名古屋学院大学外国語学部

新熊研究室

Tel. 0561-42-0351

会長 小木曾雅文

事務局 新熊 清

No. 19 日本バーナード・ショー協会機関誌

October 1996

バーナード・ショーと日本人

G. Bernard Shaw and the Japanese People

小 松 元 也

M. Komatsu

バーナード・ショーの名前を最初に知ったのは中学2年生のころ、家にある世界文学全集（新潮社？）の英国近代戯曲集で市川又彦先生訳の『人と超人』『悪魔の弟子』『聖ジョウン』を読んだときであった。それまで私は日本の作家の作品以外はほとんど読んでいなかったのだが、これを読んで日本の作家とかなり異質な感触を感じた。それが何なのか、勿論分かるはずもなかったが、何かしら乾質のさわやかな感じがしたのを覚えている。だがその後長い間ショーに触れることはなかった。ショーに取り組んで見ようかと思ったのは大学で卒業論文のことが頭にちらつくようになってからで、それはあの独特な感触を思い出したためでもあった。

その後ショーについての論文と称するものをいくつも書きはしたが、中学生のときに感じたあの感触が何に由来するものなのか、どこが「日本的」と違うのかは、そのままになっていた。それを改めて考えるきっかけを持ったのはアメリカ留学の時であった。1977年から78年にかけて私はハーバード大学のイェンチン研究所にいたが、そこの大御所はライシャワー博士で、或る日博士は我々東洋系の研究員を自宅に招いて御馳走してくれた。たまたま私がショーをやっていると知ったら、博士は「日本にはなぜバーナード・ショーのような作家が出ないのか」と聞いた。突然の思いもかけない質問であったため戸惑ったあげく、「日本の新劇人は真面目過ぎてユーモアを知らないから、こちこちの政治思想や人生論にのめりこんでしまうためだろう」と答えたが、我ながら感心しない答えであった。ただ、この質問が私にショーと日本人との間を改めて考えさせることになった。

年を取るにつれ、自分や周りの日本人の姿が少

しは見えて来るようになって、ショー的感触と日本的感触の違いも見えてきたように思った。これはもしかするとドライカレーと日本風ライスカレーの違いではあるまいかと思い始めたのである。

小説にせよ戯曲にせよ、およそ文学は或る意味で人生や人間社会の批評であり批判であろうが、対象である人間への接し方や捌き方は作家によって違う。更に大胆に言えば、個人だけでなく、人種全体として見た場合も、違いがあるように思う。少なくとも日本人の場合、対象への迫り方はすこぶる情緒的でウエットである。情緒的だから人情、真心、恩、縁、などという言葉が人間関係を表すキーワードとなる。いわばライスにどろりとカレーをかけたウエットな「ライスカレー」である。だが西洋人にはもっとドライな接し方をする者が多く、理性、論理、思想、信条、力、などが尊重される。彼らにはウエットな和風カレー感触より、ドライカレーのさっぱりした感触が向くらしい。そのなかでもショーは特にドライ派で、センチメンタリズムやロマンスが嫌いのようだ。彼が人情の分からぬ人間だとか、冷たい合理主義者だというのはのではない。彼は人間批判の場合に情緒的要素を導入し過ぎると、それに流されてしまうことを恐れていると思われる。情緒的日本人は自己批判も他人批判も不得意であるが、それは批判が感情的に流されやすいからである。その点ショーは感情に流されることがないから、彼の批判や皮肉はドライカレーのように後味がさっぱりしている。中学生の私がショーに感じた感触はこのドライカレーの感触だったのかもしれない。そしてライシャワー博士の「なぜ日本にショーが育たぬのか」という問の答えも、「日本人はショーになろうとするには余りにも情緒的に過ぎる」ということになろうか。さらに言うなら、ショーほど色々な意味で優れた作家が今の日本で余りもてないのも、彼の持つドライ感触がウエットな日本人になじみにくいためかもしれない。（平成8年6月）

バーナード・ショー流『シンベリン』

Shavian *Cymbeline*

飯田 敏博

T. Iida

シェイクスピアの『シンベリン』の最終幕は「観客がすでに知っている話をくどいほどに繰り返す浅はかさ」のために、しばしば批判的になる。というのも、シェイクスピアの他の戯曲には、幕が下りたあと、登場人物たちが状況を説明しあう場面が用意され、それですっきりと終わる例もあるからだ。

ショーは『シンベリン』がシェイクスピアの後期戯曲の秀逸な作品であることを認めながらも、その最終幕は「めちやめちやである」と考えた。イモーゼンにとって長い間行方しらずであった兄弟が王子であることが明らかになったり、突如、懺悔の人となり、しおらしい姿で再登場のヤーキモ。自分を殺そうとした夫を愛情こめて受け入れるイモーゼンの過剰な従順さなどに、ショーは納得がいかなかった。

だが、『シンベリン』の個々の登場人物にはショーは魅力を感じていた。それも、主役級だけでなく、ポリドーアやキャドウォールといった脇役にも興味を抱いていた。それゆえに、登場人物が戦闘の後、「解明」に向かっていかなる対応をするのかショーの関心の的になった。その好奇心を満足させる一つの方法が、『シンベリン』の第6幕を自分の手で書き直すことであり、その成果が『シンベリン仕上げ直し：シェイクスピアのエンディングのバリエーション』である。この戯曲は、「もし、シェイクスピアがマーローの後の世代ではなく、イブセンやショーの後の世代に生きていたら、どのように第6幕を書いただろうかと思ひめぐらせたショー流『シンベリン第6幕』」である。

ショーは女優エレン・テリーに手紙でさまざまな忠告をしている。その中でも『シンベリン』第3幕について語る1896年9月6日付けの手紙は重要だ。第3幕の適切な構成、せりふの削除に関するショーの提案はその半世紀後に執筆される『シンベリン仕上げ直し』と密接な関係がある。そこでの指摘のように削除すれば、エレン・テリーは、記憶力への耐えがたき負担から開放されると同時に、イモーゼンの真実の側面も浮き彫りにされる、とショーは考えた。しかし、ショーは冗漫なせりふを嘆きつつも、いくつかの美しいせりふを取りあげ、絶賛もしている。「耐えがたい努力をしないでシェイクスピアを学ぶ唯一成功の道は耳から学ぶこと。彼の音楽は必ず信頼できる」と、シェイクスピアのせりふの音楽性には最大限の称

賛の言葉を送っている。

ショーは『シンベリン仕上げ直し』においてシェイクスピアの『シンベリン』のエンディングの約25パーセントにあたる89行をそのまま使用した。しかし、ベレーリアスが実はシンベリン王の臣下モーガンであったこと、王子たちの乳母ユーリフリーを使って王子を連れ去った件の告白など、本筋と関係が薄いと考えれば、ことごとく削除した。ショーは「もはや誰をも驚かせることがない驚きは容赦なく取り除いた」と書いている。その反面、シェイクスピアの中にショー的会話を展開させ、別種の驚きを提供することには抵抗はなかったようだ。「シャツを代えるように、父親を代えられますか」、「もう説教されるのはうんざり」との王子たちの発言はその一例である。ポステュマスの変わりようも目を引く。ショーは『シンベリン』においてはポステュマスを、「ノルウェイのライバル(イブセン)に対するシェイクスピアの先取り」と評価し、「血の布きれ」の場面など、原典のせりふを数多く残したにもかかわらず、イモーゼンとの会話から判断されるようにポステュマスの影は非常に薄くなっている。

ポステュマスがイモーゼン扮するフィディーリをなぐりつける場面は残されたが、なぐられたあとイモーゼンはショー版でははっきりと不満を表明する。イモーゼンの無事を喜びつつも、妻の不倫を信じ込み、「もう、20回裏切ってもかわないよ」と語る夫とは対照的である。『シンベリン仕上げ直し』ではイモーゼンはその激しさ、大胆さを保持しながらも、献身的で雅量のある古い女のイメージとは縁遠くなっている。

ショーはシェイクスピア創作のイモーゼンは、すぐに気が変わる直情型の人間であり、自己表現に関しては率直そのもの、生半可な愛情や生半可な許しはあり得ない女だと考える。ショーはイモーゼンのこうした面を自作に積極的に取り入れた。イモーゼンを演じるエレン・テリーにショーは「模範の人を取り除いて、女性を注入する」ことが重要だと説く。つまり、イモーゼンを理想化し、完全な妻、家庭への愛着、献身、自己犠牲のかがみと見るだけの解釈に異議を申し立てた。ショーはイモーゼンを「二重のイメージ」で見るように勧める。ひとつは従来の「馬鹿馬鹿しい美徳の模範」としてのイモーゼンであり、もうひとつは「本物の女性」としてのイモーゼンで、これは「シェイクスピア自身がはっきりと意識しないで見事に言い当てた」とショーが評価するイモーゼンである。かんしゃくもちであると同時に完全な勇気を持ち、ふたつの気分、すなわち、子供のようなやさしさと傷つけられた時の激しい

怒りの両方を身に備えた生まれながらの貴族としてのイモージェン像である。シェイクスピアから借用した89行のうちにイモージェンのせりふが含まれていないのは、『シンペリン』の最終場面に「本物の女性」を表現する適当なせりふがないとショーが判断し、自らのイモージェンを創作することによってシェイクスピアとの差異を図ろうとしたものと考えられる。(平成8年6月)

Heartbreak Houseの演劇形式： 英国的主題をロシア風に扱った ファンタジア

The Theatrical Form of Heartbreak House

伊藤 麻里子
M. Ito

(1) 「英国的主題」と「ロシア風」

ショーは、戯曲を書く際に、伝統的な英国演劇形式を土台として、それに新しい要素を加えて発展させ、彼独自の世界を作り上げることを常に心がけているように思われる。Heartbreak Houseの場合、土台となっているのは、結婚、ロマンス、家族間の愛情といった、むかしながらの劇的設定である。シェイクスピアの『オセロ』(親子ほど歳の離れた男女の結婚)と『リア王』(老人と娘たちとの確執)が、うまくショーの作品中にとり入れられていることはみてとれよう。新しい要素としては、チャーホフが描いたように苦悩し、自問自答する登場人物、その姿をより大きな視点で見たときには、その人物が属している社会の縮図となっている構成である。この作品において、ショーがチャーホフを参考にしたことは、自分でも序文でのべているように、周知の事実である。ショーは、他の批評家とは異なり、チャーホフの作品の世界に、戦時下の英国に共通した疲弊した雰囲気を読みだし、チャーホフの作品を、序文において「傷心の家の素晴らしい劇的研究」と評した。

(2) 「ファンタジア」という演劇形式

ショーは独自の世界を表現するのにファンタジアという演劇形式をみつけた。ファンタジアの語源である、「ファンタジー」は、文学においては、夢のような非論理的な世界を表象し、それでいて、現実世界に相当するように象徴的な社会を描く。ファンタジアの世界では、ショーの得意の偶像破壊はあちこちで行なわれる。登場人物たちは今まで持っていた価値観を一気に打ち砕かれ、そうして、新しい視点で物事をみつめたり、現実を直視できるようになる。また、この劇世界では、世間一般の常識は通用せず、社会的地位や、道徳的思考はここでは無意味であり、人々は己れの信じる

ことをのみ行なう。

例えば、舞台となる家は、船の形にしつらえてある。それは、ここの主人のショトバー船長の好みで、彼の航海時代を彷彿とさせるのであるが、実は、これは当時の戦時下の英国の状況を示している。すなわち、風向きの良い時には、雄々しく進んでいくことができるが、少しでも風向きが変わってしまうと立往生してしまう。すべては風向き次第というまことに不安定な状況にあるのだ。

「英国的主題をロシア風に扱ったファンタジア」という副題が示すように、Heartbreak Houseは、三つの要素を統合した作品である。すなわち、第一次世界大戦が始まる前の不穏な状況にある英国と、確固たる行動をおこそうとはしない中流階級の国民たちの様子。ロシアの劇作家チャーホフが表現したような、確たる人生の目的を持っていない登場人物。

最後に、ファンタジアという劇形式は、プロットや登場人物の行動、場面設定においては限りなく現実離れしておりながら、訴えようとするテーマは具体的かつ現実にも即したものである。ショー独特の劇作家の二面性を、見事に両立させている。

クリストファー・イニスは、この作品について、「不条理劇の原型」ともよべる部分があるといっている。船の形をした家、ショトバー船長の奇妙な言動、この家の住人の奇妙な親子関係および主従関係などは、不条理な要素といえる。しかし、これらはすべて何かを象徴している。船は不安定な英国の状況である。船長は、ショー自身の姿が投影されているようにも思えるのだが、世間一般の無意味と思われる価値観や道徳を笑い飛ばし、彼(もしくはショー)が真実意味があると思うもののみを尊重する、偶像破壊者である。親子関係、主従関係が乱れているのは、この家出の価値観の在り方をしめしているのである。一見、不条理で無茶苦茶にみえる舞台の設定で、深遠な主題を投げ掛けるやり方は、20世紀現代英国演劇の主流の展開の仕方であって、ショーは1900年代にすでにそのさがけとなる作品を提示していたことになる。また、社会的テーマを、直接登場人物に語らせるのではなく、舞台でのそれぞれの状況から、観客が自分で判断し、それを読み取るという間接的なテーマの表現のしかたも、今までのショーの作品とくらべても、すぐれた劇作術といえよう。こうしたショー自身の工夫が手が込んでいるだけに、実際の上演をうまくこなすことは難しいかもしれないが、作品としては、充分今日の英国演劇とくらべて古めかしいものではなく、むしろ原点ともいえる劇作品である。(平成8年6月)

『真実すぎてかえって悪い』と バーナード・ショーのモダニズム

Too True To Be Good and
Bernard Shaw's Modernism

清水 義和
Y. Shimizu

1995年、夏、マイクル・フレンド・プロダクションは、ショー・コーナーで、『真実すぎてかえって悪い』を上演した。オーブリー役のロジャー・リングロスは、終幕で、歌うように、朗々とした演説を試みた。多くの観客は、オーブリーの中途半端な演説を聞いた後、それで劇が終わったという印象を持てなかった。というのは、観客は、それまで、モブリー嬢の自立劇とモブリー夫人の改宗劇を観てきたのだから、オーブリーの曖昧な演説を聞いても、それがこの劇の締めくくりだと納得しにくいからだ。

同年、冬、アーツ・エデュケーショナル・ドラマ・ロンドン・スクールは、タバード・シアターで、『真実すぎてかえって悪い』を上演した。演出家のアンドルー・ノートンは、オーブリーの演説の後に、ショーが劇の最後につけ加えたナレーションを朗読し、更に、その後に登場人物達が一同、舞台上に現れ、パント・マイムで、モブリー嬢が主人公であることを示した。この新演出は、原作の劇の結末の曖昧さを解決した。

この新解釈にもかかわらず、ノートンは、楽の日に、原作通りオーブリーの演説のところで、劇を閉じた。かくしてノートンは、二通りの上演を見せた。しかし、ノートンは、予め二通りの上演を考えていたわけではなかった。というのは、ノートンは、楽の日に、それまで作成した演出プランを完全に変更しないで、劇を突然中断して終わらせたからである。ノートンが、楽の日に演出方法を変えた理由はいくつか考えられる。恐らく、ノートンは、オーブリーの曖昧な演説を、近代社会が抱えた問題だと判断し、オーブリーの曖昧な態度を、劇的に訴えたほうが相応しいと考えたからだと思う。

オーブリーが抱えている曖昧な問題とは、オーブリーは、文明批評を行うが、彼自身は、泥棒であることだ。ショーは、数々の悪党を書いた。大抵の悪党は、最後に悔い改める。ディックは悪魔の弟子のように振る舞うが、聖人のような人物であることを明らかにする。また、ブランコ・ボスネットは馬泥棒だが、赤ん坊を助け、善人に転身する。更に、プラスバンド船長は、海賊だが、スリィ夫人に諭され、復讐心を捨て、改宗する。つまり、ショーの悪党は、誤解しているだけで、

根は、善人である場合が多い。

オーブリーはこの種の悪党には入らない。オーブリーに似たタイプの無頼漢に、『三文オペラ』のメッキースがいる。メッキースは、社会批判をするが、悪事を働いて捕まり、危ういところで絞首刑を免れる。プレヒトは、無頼派の詩人ヴィヨンから学び、社会批判をする無頼漢メッキースを作りあげた。ところで、ショーが、ヴィヨンを早くから知っていた可能性がある。ステイーブンソンが1877年に発表した『フランソワ・ヴィヨン』は、ヴィヨンを早い時期に英国に紹介した小説である。ステイーブンソンは、ショーが、1883年に発表した『キャッセル・バイロンの職業』の批評を行っている。ショーは、アーチャーを通してステイーブンソンを知っていたから、ステイーブンソンの小説に関心を抱いた筈である。ショーが、ステイーブンソンを通して、間接的に、ヴィヨンの影響を受けたかもしれない。例えば、ディックが絞首台に立つ場面と、ヴィヨンやメッキースが絞首台に立つ場面との間に、幾分繋がりがあるのは、単なる偶然ではない。

オーブリーは、大戦後、彼の生き方に行き詰まるが、人生に敗北を認めたわけではない。ということは、ショーは、善人を書いてきた楽観主義者だったが、大戦後、悲観的になり、オーブリーを創造することによって、悪党を書く悲観主義者になったのだろうか。

ショーは、1910年、『ソネットの黒夫人』につけた序文で、ワイルドとシェイクスピアは悲観論者ではなくて、世界の苦悩を跳ね返す陽気さがあつたと論じている。ショーが、1931年、『真実すぎてかえって悪い』で書いたオーブリーは、苦悩を跳ね返す陽気な態度を示すが、完全に跳ね返さないでいる。その意味で、オーブリーは、ショーが序文で示したワイルドやシェイクスピアの陽気さと異なった暗い面を表している。

オーブリーの曖昧さには、また、イブセンのペール・ギュントの暗い部分に通じたところがある。ペール・ギュントは、彼の死によって、その暗い部分を浄化してしまう。だがオーブリーは、暗い部分を跳ね返そうとして、巧く行かず、苦悩を抱えたまま、改宗もせず、死にもせず、生き続ける。この点で、ショーは、ペール・ギュントの暗い面を、オーブリーを通して、近代社会に蘇らせ、オーブリーを、プレヒトのメッキースと幾分似ているが、内面的には、かなり異なった近代人として表したと考えられるのである。

(平成8年5月)

アメリカ留学記

My Study in America

新 熊 清
K. Shinkuma

私に与えられた sabbatical leave は1993年4月からの1年間である。それをどう使うか、いろいろ思案した末、この際はショー研究に拘らないで、本務校との関係が最も深い外国、アメリカにおける研究・教育を visitor ではなくて insider として体験してみたいと思った。そのためには、当地の大学院生になるのが手取り早い。アメリカの Doctoral Program は大変ハードであるからやめた方がいい、なかでも English は膨大な数の本を読ませるから避けた方がいい、と本務校のアメリカ人教授たちは忠告してくれたが、天の邪鬼は私の常、彼らの親切に逆らう道を選んだ。

さて、次の問題はどの大学を選ぶかである。話されている英語が標準的な地域の、研究・教育体制がしっかり整っていて、比較的上位にランクされている、あまり規模の大きくない大学であること、そして、せっかく入学するからには Doctoral Program を全うしたいと思ったので、長い夏休みと比較的自由のきく1月から3月の活用を計算に入れて、選択幅は大幅に狭められるが、semester ではなく quarter 制を採用している大学が望ましい。こういう考えのもとに私が選んだのは、1872年に設立された The University of Toledo というオハイオ州立大学である(学生数18,000人)。

UT の School of Arts and Science の Department of English に交渉したのは1991年12月である。Graduate Adviser (アメリカの大学では絶対的な権限を持っている) から入学に際して示された条件は、①3年以上の在籍、②1年以上の連続した滞在、③TOEFL・600点以上、④GRE の General Test の受験である。Doctoral Program に入学後、⑤出来るだけ早い時期に M. A. Examination (Qualifying Examination とも言う) に合格すること(日本の修士課程と博士課程の単位を UT の M. A. の45単位分に振り替えることは認めもらった)、コース・ワークとして⑥English から major として55単位(必修科目30単位)以上を、他の department から minor として15単位以上を修得すること、⑦コース・ワークの単位と合わせて100単位になるよう 'Independent Study' の単位を取る、⑧2つの外国語(英語は当然外国語ではない)の試験に⑨の前に合格しておくことが要求された。更に、コース・ワーク修了後、⑨ Doctoral Examination に合格し、⑩入学した学期から7年以内に Doctoral Dissertation を提出すること、およそ以上のこと

を言い渡された。

上記の GRE (Graduation Record Examination の略) というのは、アメリカの大学を卒業していない外国人がアメリカの大学院を希望する場合に必ず課せられる試験であって、年4回実施される。私は3月に ICU で受験した。この試験は7つの sections に分かれていて、それぞれの割り当て時間は30分である(ぐずぐずしていると時間がなくなる)。Section I と II は Verbal Ability を問う問題であって、いずれも Sentence Completion が8~10問、Analogies が9~10問、Reading Comprehension では長文が2文とそれに関する設問が合わせて10~12問、Antonyms が8~10問という内容である。Section III と IV と VII は Quantitative Ability が試される。Quantitative Comparison と Math Ability が各15問である。Section V と VI は Analytical Ability を試す問題がそれぞれ25問用意されている(途中で頭が混乱して来るが、冷静さを取り戻せば対応できる)。

まず、③と④の条件を満たして私は、1992年の夏学期に入学し、2科目9単位(majorとして 'Introduction to Linguistics': minor として 'Modern European History')を履修して、本務校で後期の講義を担当するために一旦帰国した。私は気儘を言って本務校の勤務を1992年暮に切り上げ、本格的なコースの勉強を1993年の冬学期から始めた。従って、連続したコース・ワークは1994年3月までの冬・春・夏・秋・冬の5学期ということになる。許された期間内にコース・ワークを修了するには、計算上、必修科目を優先して1学期に少なくとも2科目の割合で単位を取っていかなければならない。私には、時間の余裕は全くなかった。

コース・ワークの様子を紹介するために、第1学期にあたる秋学期を例にあげよう。履修したのは 'Restoration and the Eighteenth Century British Literature' と 'Principles of Criticism' である。前者は200分授業で週2回、受講者が6人(途中で1人脱落)のセミナーであって、'MacFlecknoe' 等の風刺詩を書いた John Dryden、最高の風刺文学 *Gulliver's Travels* の作家 Jonathan Swift、風刺詩 *The Dunciad* の Alexander Pope が主たる研究対象である。教授の講義と学生の議論が約半々の時間配分。この議論に加わらないと見捨てられる。"Swift and Science" とか "Swift and Religion" といったテーマで毎週10ページ位のレポートが要求され、それを書くために読まなければならない本は毎週3乃至4冊(6冊の時もあった)、学期(3ヵ月間)の中間に20ページ弱のレポート、期末に30ページのものを提出する(期末のテーマは "Swift and Utopian Literature" であっ

た)。どのレポートも1週間以内にAとかAマイナス(A-)という評価とともに批評をつけて返却される(中間のレポートには1ページの、期末のそれには2ページを超える批評が付けられていた)。

もう一つの科目 'Principles of Criticism' は、100分授業で週3回、受講者は7人、プラトンやアリストテレスの古典的文学批評から新批評、構造主義、フェミニズムにいたる文学批評の歴史にそって講義が進められる。各批評原理について教授による講義のあと、学生はそれぞれの代表的な論文を毎回2・3点読んできて議論をする。更に毎週、1篇の小説または詩集が指定され、指示された批評原理にもとづいて5ページ位の批評文を書くことが要求され、期末には、各自が最も納得のいく批評原理を選び、他の諸原理と比較しつつその特徴を論じるレポート(20ページ)を提出した。この科目の場合も、すべてのレポートが評価とともに教授の批評をつけて返却された。

1992年の夏に M. A. Examination のための "Reading List" をもらっていたので、そのあとの帰国中の秋は受験勉強に没頭した。"List" に載っていたのはイギリスの作家12人(Chaucer, Shakespeare, Spenser, Milton, Swift, Pope, Wordsworth, Austin, Dickens, Tennyson, Joyce, Yeats)と、アメリカの作家13人(Taylor, Emerson, Thoreau, Melville, Whitman, Dickinson, Clemens, Hemingway, Faulkner, O'Neill, Wright, Eliot, James)の計25人とその作品50篇である。私は1993年夏に M. A. Examination を受けた。問題は次の4問、制限時間は4時間である。

I. Write a full and complete *explication de texte* of one of the following poems:

"I'll tell you how the Sun rose...." という行で始まる Dickinson の詩が、詩人の名を伏せて示される。

II. Discuss the following proposition with specific references to literary works, including at least two of the following:

"Nineteenth-century literature discovers, or invents, the ideas of childhood and of adolescence as the era's obsession with history expands to include the history of individual human development. For an increasingly bourgeois audience, writers turn from Gods and kings to the often fragile bourgeois individual."

III. T. S. Eliot's "The Wasteland" has been called "the icon of American modernism." Discuss the implications of this remark as you consider the poem itself and at least

one of the following novels: Hemingway's *The Sun Also Rises*, Faulkner's *The Sound and the Fury*, and Wright's *Native Son*.

IV. "We never really confront a text immediately, in all its freshness as a thing-in-itself. Rather, texts come before us as the always-already-read; we apprehend them through sedimented layers of previous interpretations, or... if the text is brand new... through the sedimented reading habits and categories developed by those inherited interpretative traditions." Frederick Jameson:

The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act.

In light of Jameson's statement, discuss your own understanding of three of Shakespeare's tragedies (*Hamlet*, *Othello*, *King Lear*, and *Macbeth*).

1週間後に、M. A. Examination Committee (Graduate Adviser を含む4人の教授によって構成) による2時間の面接があって、可否の判定が下された。

外国語の試験は、受験者が選択した言語で書かれた論文100ページ分を外国語試験委員会に提出し、それが英語に翻訳されていないという確認を受けて、そこから英語訳の問題を出題してもらうのである。私は1993年の夏学期にフランス語の試験を、1994年の冬学期にドイツ語の試験を受けた。

私の sabbatical は、1994年3月で終わったが、'Old English' が未修であった。通常この科目は秋学期に開講されるのであるが、他の必修科目と重なったために履修できなかったのである。そこで、担当教授にそれを1995年度は冬学期に設けて欲しいと頼んだところ、親切にも聞き入れてくれた。こうして、私のコース・ワークは通算7学期をかけて完了したのである。

残るは Doctoral Examination である。まず、Graduate Adviser と相談して Doctoral Dissertation の内容をほぼ決定する。Adviser の勧めがあって、私の論文の内容は 'The Relationship between Japanese Translations of English Literature and the Creation of Modern Japanese Literature' と決まった。それによって比較文学担当の教授が指導教授として決まる。次に、文学研究の中から3分野を選び、その分野を担当する3人の教授に Doctoral Examination の出題を依頼する。以上の4教授と Graduate Adviser、そして他学科からの教授1人に加わってもらって、計6人の教授によって Doctoral Examination Committee と Advisory Committee が構成される。彼らによっ

て Doctoral Dissertation の指導と審査が行われるのであるから、どの分野を選ぶか、どの教授に出題の依頼をするか、学生にとって大変重要となる。

私は1995年4月から本務校で英米文学概論の授業を担当することになっていたため、その準備を兼ねて、知識の補強をするために、専門にしていなかったアメリカ文学から3分野を選ぶことにした(親しんできたイギリス文学にすべきであったと気づいた時は手遅れであった)。私が選んだのは American Romanticism と American Realism と Modern American Literature である。“Romanticism” の教授は17人の作家と42篇の作品を“Doctoral Reading List”として挙げた。その中には、Brown の *Clotel: or the President's Daughter* や、Douglass の *Narrative of the Life of Frederick Douglass: An American Slave*, H. Jacobs の *Incidents in the Life of a Slave Girl*, Rowson の *Charlotte Temple: A Tale of Truth* といった、日本では特殊な場合を除いて一般に読まれる可能性のないものが随分含まれていた。“Realism” と “Modern” の教授も同様に沢山の作家と作品を列挙した。3人の教授から“Doctoral Reading List”を渡されたのは1994年夏のことであった。それから、気が狂ったように読書に明け暮れる毎日であった。

これらをすべて読破するのは至難であるが、要求されたことはやり遂げねばならぬ。とにかく全てを読み終えて、私は1995年春の連休に Doctoral Examination を受けることにした。問題は次の5問(問Ⅲは2問)、制限時間は6時間である(私は1時間おまけをしてもらって7時間頑張った)。

I. AMERICAN ROMANTICS:

Compare Ahab (*Moby-Dick*), Chillingsworth (*The Scarlet Letter*), Dr. Flint (*Incidents in the Life of a Slave Girl*) and Simon Legree (*Uncle Tom's Cabin*), and discuss what these characters reveal.

II. AMERICAN REALISM:

According to Susan Harris, “By leading readers to assume that the story they are reading is one whose basic outline they already know... and then disappointing those anticipations, texts can alter reader's literary, and ultimately social, horizons.” Do texts by 20th century American writers attempt to alter readers' expectations and social horizons? If so or if not, explain how. Be as specific and detailed as possible as you discuss at least five of the following 20th century authors:

Steinbeck, Hemingway, Faulkner, Fitzgerald, Ellison, Wright, O'Connor, Bellow, Oates, Updike, O'Neill, Williams, Miller, Albee.

III. MODERN AMERICAN LITERATURE:

Answer the following two questions.

1. Walter Allen, in his classic study *The Modern Novel* wrote, “But there is another adding factor in the American novel: a constant preoccupation with the meaning of being an American.... It is as though the American were not simply, as Crèvecoeur said, a new man, but also a self-created man. In every generation it seems that the American, by virtue of his being and American, with all that that entails, must come to terms with his Americanness and seek to define it. In the last analysis, the theme of many of the best American novels is America itself.” Does this apply to the novels on your reading list? To which, particularly?
2. Robert W. Corrigan, in his important essay “The Theatre in Search of a Fix,” says, “[Many twentieth-century playwrights] believe the theatre must confront audiences with that sense of isolation—the sense of man's being encircled in a void—which is an irremediable part of the human condition. In such a universe communication with others is almost impossible, and the language of these plays is symptomatic of their authors' belief in man's inability to communicate and express his basic thoughts and feelings.” To which modern American playwrights might this observation apply?

IV. AREA OF SPECIALIZATION:

Discuss the influence of British and American literature on some aspect or aspects of Japanese literature (e.g. idea of the novel, plot development, characterization.)

Doctoral Examination の場合も、M. A. Examination と同様、Doctoral Examination Committee の6人の教授による面接が2時間あり、その合議によって合否が決定される。

こうして、いよいよ最終段階を迎えることになる。私は Doctoral Dissertation の作成を1995年6月から始めた。資料のほとんどは既に集めてあったが、それでも書き進めるにしたがって足りないものが沢山出てきた。本務校の図書館に援助を仰いで資料を補ってもらった。1章を書きあげる

毎に Doctoral Dissertation Committee に送ったが、第3章を書いている間に序文が送り返されてきた。余白に質問やコメントがびっしり書き込まれているのを見て頭を抱えたが、そのようなものに拘っていたら最後まで書き終えることができなくなってしまうと思ったので、次々に送り返されてくる drafts を無視して、がむしゃらに最終の第5章まで書きあげた(最後のページは493ページであった)。それは9月下旬であった。

一息入れる間もなく、Committee から送られてきたコメントに可能な限り忠実に書き直す作業に入った(しかし、納得のいかないコメントは大胆に無視した)。後期の講義があるので時間の工夫に苦労したが、書き直した原稿も1章毎に送った。これもまた、かなり少なくなっているとはいえ、新しいコメントを相当付けて返されてきた。Committee の指示でかなりのページを削除したので、最後のページは462ページになった。最終章を送ったのは冬休みの少し手前であった。

6月以来1日の休みもとっていないので、疲労は限界を超えていたが、引き続き2度目の書き直しに入った。1996年1月末に、その作業を2月中に仕上げる見通しが立ったので、3月に Dissertation の Defense をしたいと Committee に申し出た。Defense というのは、Dissertation について Committee を相手にして行う討論会形式の答弁(2時間)であって、candidate にとって大変緊張するものである。それが3月13日に行われることが決まった。441ページの2度目の書き直し原稿は2月中旬に送った。

Adviser は可能な限り早く UT に来て、minor change であるから、修正をした方がいいと教えてくれたので、10日の余裕をもって渡米した。Dissertation の形式の修正が求められ、条件を満たすのに1週間ほどかかった。Defense は心配したほどではなく、案外淡々と終わった。Committee からの助言があって、更に原稿に修正を加えて、ようやく私の Dissertation は完成した。最終稿の最後のページは439ページであった。Chief of the Advisory Committee と Dean of the Graduate School に論文の表紙にサインしてもらった時、天に上るような気分であった。それは1996年3月22日のことである。長くて(しかしアッという間に過ぎた)、しんどい(しかしちょっぴり心地いい)3年と10か月であった。(平成8年7月)

Bernard Shaw, Proto-Existentialist: "Don Juan in Hell" and Jean-Paul Sartre's *Huis clos*

Michel W. Pharand

The underworld is the setting for the "Don Juan in Hell" act of Shaw's *Man and Superman* (1907) and of Jean-Paul Sartre's *Huis clos* (1944), two dramatic manifestos that illustrate the same keynote for the improvement of humanity: total, personal responsibility. And though Shaw has been called "an existentialist thinker" (Colin Wilson 1957) and even an "existentialist before his time" (R. F. Dietrich 1995), Shaw's ideas in relation to Sartrean thought have never been thoroughly examined.

Ancillary to the plays are two short theoretical works: Shaw's "lay sermon" entitled "The New Theology" (1907), and Sartre's "conférence," "L'Existentialisme est un humanisme" (1945). The tracts and one-act plays are ideological complements in which Shaw's Life Force and Sartre's "engagement" or commitment are not mere abstractions, but pragmatic means of achieving individuation insofar as mind and will represent the possibility of human progress. Both writers believe in personal, social, and universal improvement, a progression that the plays approach from opposing but complementary perspectives: "Don Juan in Hell" as an affirmation of human potential, *Huis clos* as an object-lesson in its abuse. Whereas Juan directs his Life Force to positive ends, Sartre's people pervert the idea of "engagement" into cruelty; hence Juan can leave hell but Inès, Estelle and Garcin must remain in it. For Shaw and Sartre, therefore, dependence on others is duplicity, the opposite of authenticity and commitment. For Juan, where there is pure happiness, there is no challenge and thus no purpose or meaning; for the French trio, where there is truth, there is no deceit and thus no self-gratification. Everyone is miserable in hell — but for very different reasons.

Salvation is possible only in action and praxis: in Shaw's Life Force and Sartre's "engagement." "The object of this whole evolutionary process is to realize God," writes Shaw. This is precisely the terminus of Sartrean commitment: "Être homme, c'est tendre à être Dieu." To be a man

is to tend towards being God. Shaw's projected Superman is thus a distant cousin of Sartre's projected Man-God, and Shaw may thus have been an "existentialist before his time."

ヴァージニア・テックにおける、 1992年のショーの会議

The 1992 Conference on Shaw, at Virginia Tech

島村 東太郎
T. Shimamura

1992年11月4日(木)から7日(日)までの4日間、バーナード・ショーの会議がヴァージニア・テックで開催された。本稿は、この会議を概観するものである。

ヴァージニア・テックという名前は、大学の近くの人々が用いている通称である。テックと聞くと、テクノロジーの省略形をすぐに頭に浮べて、工業大学を連想する。しかし、これは間違いであって、実際にはポリテクニックである。正式の名称は、ヴァージニア・ポリテクニック・インスティテュート・アンド・ステイト・ユニヴァーシティという。この大学は、農学部と文理学部を中心としたヴァージニア州立の大学である。(この正式の名称を日本語に訳出するのはむずかしいので、筆者もこの通称を用いたい)。

ヴァージニア・テックは、ヴァージニア州のブラックスバーグという小さな町にある。ヴァージニア州の中では、南西部にある。アパラチア山脈のふもとのあたりである。筆者は、ロンドンから東京へ帰る途中に米国に立寄り、会議に参加した。11月2日にロンドンをたちピッツバーグへ、3日(火)には快晴のなか、南へ1時間、アパラチア山脈の上を飛んでロアノーク着。ここの地方空港から小さ

なりムジンで、81号線を南西の方向に走り、途中で支線に入り、北の方向に少し走った。紅葉の季節が終ろうとしていた。「2週間はやく来ていたら、紅葉がすばらしかったのに」といわれた。かえでの葉が、ほとんど落ちていた。

4日(水)から7日(日)までの期間は、くもりか雨で、天気にはめぐまれなかった。

11月4日(木)、「1992年、ショーとこの100年」と題する会議は、夕食会から始まった。M. エスリンが「ショーにおける本文とその意味」と題して、基調講演を行なった。

11月5日(金)、午前中は朝9時から、S. ワイントラウプ「ショーは劇作家になることを決心する」、C. ニュートン「1892年12月9日」。午後は1時30分から、R. ネイサン「オーストラリアとニュージーランドにおけるショーの戯曲」、若い研究者としてJ. レノルズ「ヒギンズを分析する」。ダン・ロレンス氏への感謝の集い、夜は8時から、学生会館で『ブランコ・ボズネット』と『運命の人』を観劇。

11月6日(土)、午前中は、昨夜の芝居についてのシンポジウム、若い研究者としてJ. E. ゲイツとK. E. ケリーが発表。午後はN. グリーン「ショーとアイルランド演劇」、ショー学者のF. P. W. マクダウエル、C. インズ、M. オウハラが発表。夜は8時から、『ありそうもない話』を観劇。9時20分頃から、このシンポジウム。11時ごろ散会。

11月7日(日)、午前中はC. A. パーストとB. F. ドュコー、午後はI. ウォードルとM. デイヴィスとJ. L. ヴィーゼンタール、夜は7時30分からP. バーンズの発表、8時45分からシンポジウム「百年経過して、ショーにはこれから何があるか」。

これらの研究発表を、デュコー氏が編集したSHAW 第14巻(1994年)で読むことができる。

(Sept. 1996)

日本バーナード・ショー協会の行事 Activities of the Society 1995-96

平成7年度(1995年4月—96年3月まで)

(1)春季大会(実践女子学園渋谷校舎、6月10日(土))
Spring Meeting (Jissen Jyoshi Gakuen at Shibuya, Tokyo. Sat. 10 June 1995).

The 25th Annual General Meeting of the Society.

- ①伊藤麻里子「Heartbreak Houseの演劇形式」
- ②清水義和「英国、アイルランドで見たショーの芝居」
- ③Michel Pharand, "The Frenchification of Bernard Shaw: A Study in Paradox".

(2)第14回作品研究会(聖心女子大学、9月15日(金))
The 14th Shaw Play Study Meeting

作品(Mrs Warren's Profession), 報告者(島村東太郎)

(3)秋季大会(愛知学院大学、10月21日(土))
Autumn Meeting (Aichigakuin University, Nagoya. Sat. 21 Oct. 1995).

- ①清水義和「Too True to be Goodとショーのモダニズム」
- ②鈴木龍一「アイルランドの歴史についてのショーとフリールの接点」

(4)第15回作品研究会(愛知学院大学、3月10日(日))
The 15th Shaw Play Study Meeting
作品(Candida), 報告者(小幡正子)



THE BERNARD SHAW SOCIETY OF JAPAN

Editor, Totaro Shimamura

No. 19

October 1996

研 究 動 静

○ 伊藤 麻里子 ‘“Don Juan in Hell”: The First Shavian Discussion Play’, *The Edgewood Review* No.22 (1995年11月)。

○ 飯田 敏博 「バーナード・ショー流『シンペリン』」, 『鹿児島経大論集』第36巻第4号 (1996年1月)。

○ 小幡 正子 ①‘Mishima Yukio: His Involvement in Traditional Japanese Drama’, 『八千代国際大学紀要』第7巻第1号 (1994年4月), ②‘The Dramatic Theory of Mishima Yukio’, 『八千代国際大学紀要』第8巻第2号 (1995年7月), ③‘On A House in Flames (『火宅』) by Mishima Yukio’, 『八千代国際大学紀要』第8巻第4号 (1996年1月)。

○ 島村 東太郎 ①‘ダン・H. ロレンス文書と S. P. アルバート文書」, 宇都宮大学外国文学研究会『外国文学』No.43 (1994年2月), ②‘Niagara-on-the-Lake, Ontario. —18世紀末と今日—」, 『外国文学』No.43, ③‘カナダの芸術における独自性」, *GBS* No.18 (October 1995), ④‘1905年, 劇作家バーナード・ショー登場」, 『外国文学』No.45 (1996年2月)。

○ 清水 義和 ①‘A Japanese View’, *The Shavian* Vol.17, No.8 (Winter 1995-96), ②‘イブセン・ショー・ウィリアムズの啓示的テーマ『桜の園』『傷心の家』『欲望という名の電車』」, 『愛知学院大学教養部紀要』第41巻第1号 (平成5年7月), ③‘『暗礁に乗りあげて』における G. B. ショーの啓示的テーマ」, 『愛知学院大学語研紀要』第17巻第1号 (平5.11), ④‘“こっくりさん” ショーの『傷心の家』の場合」, 『愛学大教養部紀要』第41巻第2号 (平5.12), ⑤‘ショーとパロディ『ジャンヌ・ダルク』」, 『大崎文芸』第3号 (平6.8), ⑥‘Fric Bentley on the Stage: Shaw & Brecht」, 『愛学大教養部紀要』第43巻1号 (平7.7), ⑦‘The 1994 International Shaw School」, 『比較文化』(文化書房博文社) 創刊号 (平7.9), ⑧‘A Fool & A Saint On the Rocks」, 『愛学大教養部紀要』第43巻2号 (平8.1), ⑨‘Saint Joan & Christmas Pantmine Magic」, 『愛学大教養部紀要』第43巻3号 (平8.3), ⑩‘ヒーローのいない劇: On the Rocks」, 中部片平会編『英語・英文学の風』30周年記念論文集 (金星堂), 平8.3。

○ 新能 清 ①‘The Lineage of Utopian Literature and Bernard Shaw」, 『名古屋学院大学外国語学部論集』第6巻2号 (1995年4月), ②‘The Plot and the Theme in Mrs Warren’s Profession」, 『名学大論集』(人文科学編) 第32巻1号 (’95.7), ③‘Counterfeit Solution and Shaw’s Intention」, 『名学大外国語学部論集』第7巻1号 (’95.10), ④‘バーナード・ショー研究—演劇論』(文化書房博文社), ’96.3, ⑤‘文学博士号授与 (立正大学), 1996年3月, ⑥Ph. D. (The

Univ. of Toledo, 米国オハイオ州立トレド大学), 1996年6月。論文 (The Relationship between Japanese Translations of English Literature and the Creation of Modern Japanese Literature)。

○ 鈴木 龍一 ①佐野・水落・鈴木『異文化理解のストラテジー』(大修館書店), 平7.3。

○ ファラン, ミシェル (Michel Pharand)

①“Ritual and Romance: Symbolism and Subtext in Tennessee Williams’ The Glass Menagerie”, in *Journal of Inquiry and Research*, no. 62 (July 1995), 115-28.

②“The River-God and The Thinker: Auguste Rodin Reinvents Bernard Shaw”, in *Journal of Inquiry and Research*, no. 63 (February 1996), 137-52.

③“A Great Deal to be Grateful For: Robert Graves and Edward Marsh”, in *Gravesiana: The Journal of the Robert Graves Society* (forthcoming July 1996).

④“Bernard Shaw, Proto-Existentialist: ‘Don Juan in Hell’ and Jean-Paul Sartre’s Huis clos”, in *Journal of Inquiry and Research*, no. 64 (forthcoming July 1997).

⑤Review of Bernard Shaw: The Ascent of the Superman by Sally Peters, in *English Literature in Transition, 1880-1920*, vol. 40, no.1 (forthcoming Jan. 1997).

⑥“The Siren on the Rock: Bernard Shaw vs. Sarah Bernhardt”, in *SHAW, The Annual of Bernard Shaw Studies*, vol. 18 (forthcoming 1998).

○ 升本 匡彦 ①‘横浜ゲーテ座を建てたヘフト」, KLM オランダ航空ウィンドミル編集部(編)『日蘭交流の歴史を歩く』(NTT出版), 平6。②‘神戸体育館劇場(1)」, 『東洋における西洋劇場—1860年代から1920年代まで—』(平成5・6年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書), 平7。③‘外国人劇場と『ミカド』—日本で上演されたジャポニスム」, 佐々木英昭(編)『異文化への視線—新しい比較文学のために』(名古屋大学出版会), 平8。④‘フェビアン協会—多様性の統一」, 松村昌家(他編)『英国文化の世紀』第5巻, “世界の中の英国”(研究社), 平8。⑤‘西洋芸能のアジア巡業ネットワーク」, (〈異文化交流と近代化〉京都国際セミナー1996組織委員会(国立音楽大学図書館内)), 平成8年。

○ 的場 淳子 共訳『現代アイルランド演劇』第3巻(トマス・キルロイ特集)(新水社), 平7。